

氏名(本籍)	いた がき あき よ 板 垣 昭 代 (山 形 県)
学位の種類	博 士 (医 学)
学位記番号	博 甲 第 2394 号
学位授与年月日	平成12年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	医学研究科
学位論文題目	中高年2型糖尿病患者へQOLを考慮した継続的教育方法に関する研究
主査	筑波大学教授 医学博士 赤 座 英 之
副査	筑波大学教授 医学博士 紙 屋 克 子
副査	筑波大学助教授 医学博士 武 島 仁
副査	筑波大学助教授 医学博士 磯 博 康
副査	筑波大学講師 医学博士 松 崎 一 葉

## 論 文 の 内 容 の 要 旨

### (目的)

生活習慣病である糖尿病の治療は医学的治療とともに患者自身による自己管理が重要な要素である。本邦においてもこの分野において様々な取り組みが始められており、糖尿病療養指導士の資格認定の動きなどはそのひとつである。しかし現在までのところ知識重視型の教育が中心であり、長期間の自己管理を目的とした教育・支援の方法は確立されていない。本研究では自己効力感理論を応用して患者教育を行い、さらにQOLを評価項目として加えることにより効果的な患者教育の方法を探ることを目的とした。

### (対象と方法)

総合病院糖尿病外来(単独の主治医)に通院中の40歳以上の2型糖尿病患者で下記の条件を満たす45例を対象とした。1) 2ヶ月間以上にわたり治療法に変更のないもの。2) HbA1cが7%以上であること。3) 網膜症は福田分類でAⅡ以下、腎症は微量アルブミン尿までであること。4) 日常生活行動が自立していること。5) 教育介入に対して通常理解力があること。また全員において本研究についての文書による説明と同意をえた。45例を無作為に介入群23例、非介入群22例に振り分けた。介入群では開始時より4週毎に外来受診時の面接あるいは手紙により、1) 患者自身で治療上の目標を持つ、2) 自分のデータや体調に関心を持つ、3) 成功例の情報提供を受ける、4) ポジティブフィードバックを受ける、5) 心理的負担の軽減、6) 定期的な接触を保つ、ことを要点として教育介入をおこなった。非介入群ではこれらを施行しなかった。評価はQOLについては中高年2型糖尿病患者のQOL尺度、自己効力感については慢性疾患患者の健康行動に対するセルフエフィカシー尺度により、開始時および終了時(20週後)に判定した。またHbA1c、空腹時血糖値(FBG)、Body Mass Index(BMI)を開始時、4週毎の来院時、終了時に測定し比較検討した。

### (結果)

両群間に患者背景に有意差はなかった。HbA1c、FBG、BMIの検討では、20週間経過観察ができた症例のみでHbA1cが有意に低下していた( $p=0.01$ )。各評価項目に対する、年齢、罹病期間、性別、治療方法、教育介入の

有無，開始時のHbA1c，の影響を多重ロジスティック回帰分析により検討したところ，教育介入のみがHbA1cの改善に影響していた（オッズ比：6.4 95%信頼区間 1.004-41.0）。また年齢はセルフエフィカシー尺度の改善を阻害する要因であった（オッズ比：0.83 95%信頼区間 0.72-0.97）。

#### （考察）

本研究では，従来行われてきた知識重視の教育でなく，自己効力感の強化とQOLの向上を目標とし心理的支援を行う方法の可能性を探ることを目的としたが，経過観察終了時点では教育介入群のHbA1cの有意な改善と，多重ロジスティック回帰分析により教育介入がHbA1cの改善に有意な影響を及ぼしていることより，今回の教育介入のプログラムが中高年2型糖尿病患者の継続的教育に有用であることが示唆された。

### 審 査 の 結 果 の 要 旨

対象となった症例数が45例と少ないこと，脱落症例についての考察が不十分であること，教育プログラムの具体的内容の説明不十分であることなどの批評がなされたが，生活習慣病である糖尿病に罹患した患者の長期にわたる安定した自己管理を得るための方法として自己効力感理論を応用した教育プログラムの有用性を示し，さらにQOLを評価項目として加えることにより教育効果が高められることを実証しており意義のある論文である。

よって，著者は博士（医学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。